
あっ熊様

腐りかけの鯖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あつ熊様

【コード】

N5598H

【作者名】

腐りかけの鯖

【あらすじ】

目が覚めたらヒグマが居ました。

プロローグ

うん、気付いていましたよ。

何かおかしい、何かおかしいと思いながら僕は目を反らして朝になっていたんですね。

だっておかしいじゃないですか、目が覚めたら2メートル以上もあるヒグマがすやすやと気持ちよさそうに僕のベットで寝ていました。

こういう場合美少女が来るはずなのになんだこの夢はと思いましたよええ。

でも生温かい鼻息が僕の顔に扇風機の『中』の強さでゴーゴーと来るんです。

匂いはミントのさわやかな匂いでした。

正直いい匂い……でした。

無理やり夢だと思って寝なおしましたよ。

でもすぐにわかりました夢じゃないって。

ヒグマが寝返つてもさもさした右腕が僕の顔を覆い隠したんです。

息が苦しくなって、混乱して、頭の中が真っ白になって「うぎいあ

ああああああ！」「って叫んだらその大きな腕で叩かれたんです。

「うっさいんだよね、こんな真夜中にさああ？寝かせろ」って言

われたんです。

言われたんせすよ ヒ・グ・マ に。

多くの疑問とほっぺの痛みがありました、小さな声で「は〜い」

って言つてその場は寝ました、寝たフリでしたけどねハハッ。

日の光が差し込んで重い体を起こし枕の隣にあつたメガネをかけると隣で「おはよう」となかなかさわやかな声で新聞読みながら

僕の机に座ってあのヒグマが言ったんです。
部屋のドアの近くでは母が泡を吹いて寝ていました。

僕の名前は黒川幸一、ごく普通のガリ勉高校二年生。
この日をきっかけに僕の生活はこのヒグマによってめちゃくちゃに
なってしまふ。

この時の僕にもそれは勘付いていた。

プロローグ（後書き）

初めて書いたものなのでかなり酷いと思いますが・・・なにとぞ。

第一話

第一章

テラの遺産

はるか昔、世界には思念が生まれた。

命を守るための防衛本能である【恐怖】。

探究心や意欲の原点である【知欲】。

子孫を残すためにフェロモンを分泌する【性欲】。

他者を犠牲にし己のエネルギーにする【食欲】。

これらの思念をすべて集結した思念集合体が同時に形成されていた。この思念集合体は【テラ】と言われる。

しかし【テラ】はまれに分裂をし、欠片が宇宙各地でただよう事がある。

それは【テラの遺産】と呼ばれるもので、生命誕生とともに憑依する事がある。

憑依した【テラの遺産】は、その生物の感情によって【テラの遺産】の思念が更新される。

「って訳」

「……………はあ！！！！？」

「いやいや訳わからないから、っていうか勝手に人の家にあがってくつろいでんじゃねえよ」「

「いやーまあ細かいことはいいんじゃないねー」

「じゃっつっつねーよ」

やはりこのクマは夢ではなかった、先ほどほっぺをつねってみたが昨日の痛みがプラスされた痛みがあり、部屋の中はミントの匂いであふれている。

さわわああん。

「つなよりも、なんでクマがしゃべれるんだよ！！何もんだよ！！目的はなんだよ！！」

「うっわガリメガネだねマジで」

皮肉のような言葉を残し、一呼吸おいてからその人をまる飲みしちやいそうな大きな口を開けた。

「まあ順を追って説明すると、俺は時空の歪みを利用して魔界から来た魔族だ。ちなみにこの姿は仮の姿だね」

普通の人間がこのセリフを言ったら「なに電波言ってるの」とか「魔界じゃなくて麻界だろ、どんだけシャブったんだよ」とか僕なら思う。

この話す巨大なクマを目の前になるとなんと説得力のある言葉に聞こえてくるから不思議である。

「んでー・・・目的かあ、さっきの話理解できてないだろうし、これ以上話してもわかんねーと思うけどお前の中には【テラの遺産】ってのがお前の知らないうちから憑依してんだ。でそれがあると宇宙全生物の基準になるんだ。まあ今回の【テラの遺産】は性欲だっ

て話だから、たぶんお前の趣味によって全生物の性欲が更新されるんだよね」

「全生物の性欲の更新・・・？」

「まあつまり今の状況ならスタイルがよかったり、顔がよかったり、年齢が若い、可愛かったり綺麗なら気になって、そんな女の裸を見ると興奮するのが普通、だろーね」

なにクマが知ったような事を言ってるんだ。とにかく早く出てってくれと僕はろくに話も聞かずにただそう思っていた。しかしこの後、僕の体に起きた重要性について僕は分かってしまった。

「もし【テラの遺産】を持ったお前が熟女が大好きハアハアとか言うことになったらそれで統一される。まあそうなったらグラビアは熟女にそまるだろーね」

「うーん？」

「まあ熟女ならいいんだ。女にしてもオヤジ好きになるだけだからな。でも逆がまずいんよなあー。まだ十歳くらいの女の子が好きだあとか言ってるロリ好きになってしまつとどうなるかねー・・・想像つくか？」

「・・・なんか想像ができてきたかもしれない」

「つまり小さい女の子、もしくは男の子と結婚しマッド運動まで普通になる、一般的になるって訳ね」

世界のホモサピエンスの在り方が僕によって左右されるという明らかな確信が僕にもできた。

ただ頭では理解しても常識で考えれば絶対にあり得ることではない。しゃべるクマを目の前に常識は通用しないだろうが。

それと先ほどから不規則に飛んでくる唾で顔が徐々にぺちやくちやしてきた。

「ちよつ、んな馬鹿なことあるの？」

「あるんだなこれが。もしもお前が男に目覚めたりしたら……子孫存亡の危機に全世界がなるんだろうさ。マッチョとマッチョがお互いに体を寄せ合い常人では想像のできないことがあれやこれやでどっかんどっかんなるのが当たり前になる訳ね」

「いやだあああああ！ 気持ち悪ううー、……なんでマッチョ……」

「とにかくだ【テラの遺産】の影響は70パピル……と人間界で言うと7000日だ。人間界では19年と60日くらいだとかなんとか言ってたっけ調査局の連中がね」

「調査局ってあなたは仕事なんかで来たのか？」

「あゝそーだね。魔界の【テラの遺産】発見機みたいなのやつに17年？だか前にお前が当たって、そんでだいたい5年前とかにお前の血を吸った蚊を他の魔族のやつが採取して調べたら大当たりだね。そろそろ影響がでる日も近くなつたから魔王が俺を配属したわけだけど、正直なるようになればいいかなって感じたが、お前の感性が変な方に行かないようにするのが俺の仕事さね」

「魔王って・・・いやそれより魔族ってあなた以外にこっちにいるのか？」

「あゝ・・・100人くらいだって言ってたな、調査局の奴らがね」

調査局って・・・いやそんなことよりこんな得体の知れない連中が100人近くも居るのか。
国は何やってんだ。

「まあその百人も人に近い姿に化けてるから気付かれないだろうがね」

「えっじゃあなんで熊なんだよ」

「熊って鮭取れるだろ、俺さあ人間界の鮭って大好きなんだよね」

「・・・そう」

別に深い意味もなくクマの姿をされるとこちらにしてみれば迷惑なのだが・・・そう言えば泡を吹いて気絶していた母がいない。どうしたものか。

「あのさ、さっきまでここで倒れてた人知らない？」

「あ、ああそこに寝てた人なら電話かけてたね」

「電話ってことは」

たぶん警察にかけたんだ。

よし、これでこの変なものどこかに行つてくしかないだろ。
さすが残念な母さんだ、そういうことはやつてくれるね。

「おいあんた、いくら日本の警察でも銃は持つてるんだ。おとなしく出ていなないと撃たれて死んじゃうぜ」

「ああ、まっ大丈夫だろ。軍やお偉いさんは他の連中がおさえとい
たつて言つてたからね。しかしなんとかって奴で撃たれると相当ま
ずいのか」

いろいろ知つてるくせに銃は知らないのか？いやでもこれはチャン
スかもしれない。

「そりやまずいつて当然な。鉛玉が超高速で飛んでくるんだから。
まあ熊の姿してるから確実に撃たれるよ。嫌だったらさっさとここ
から」

「うーん、水素爆弾なら半径五キロ程度なら大丈夫なんだけど」

ははは、それなら安全ですよ〜と顔が引きつりつつピーポーピー
ポーと威勢のいいサイレンが聞こえてきた。

「こつちやあああああん！！！！待つててねすぐ助けに行くから
ああああああん」

参観会で同級生に残念呼ばわりされた僕によく似たガリメガネの母
親の荒々しい声がする。

来ちゃダメだつてのに、来たら殺されるって……もし本当な
ら水素爆弾が効かない相手に人類が勝てるわけがない。

そんなことを考えてる間に険しい顔をした中太りのバーコードオヤ

ジと、まだ若くて身長が高く、目つきの悪い警官が部屋に銃口を突き付けながら入ってきた。

「うごくなっついいいいい!!!!?」

そりゃ驚くでしょう綺麗な姿勢で座りつつ新聞を持ったミントの香りのする2メートル以上あるヒグマがいたら。

バーコードのほうのけ反りつつ銃口をはずさないようにプルプルしていた。

隣の若い方も啞然としている。

その刹那であった

「ばくはつしろっ!!」

クマがそう叫ぶと突然警察2人が構えるリボルバーが内側から謎の爆破が起きる。

「なんじゃこりゃあああああ あっ、ふふふ」

若い方が特に怪我をしたわけではないがあ有名なシーンを真似して余韻に少しハマっている様だ。

バーコードのおっさんとはとにかく口を開いてプルプルして言葉も出ないようだ。

と言いつつ僕も同じ現象に見舞われている。

「なに・・・今の」

呆然としつつフツとでた言葉にヒグマはちゃんと答えてくれた。

「今のが魔法さね。爆発したって言ったって空気が膨張しただけだ

けどね」

『ひんぎいいいやあああああああ！！！！！！！！！』

さっきの魔法だと言いきる謎の爆破とクマが人の言葉を喋ったことにより警官二人は相当パニックを起こしたらしく、血相を変えて二階の窓から飛び降りて逃げて行った。

きつと屋根がないから打撲しただろうけど。

部屋の中は嵐にさらされた後だった。

魔法まで見せられてしまってもう何が何だか笑うしかなかった。

「あっそうだ」

すうつとこつちに向って手を差し出してきた。

「ずっと自己紹介忘れてたっけなー、俺はオーデューム・ティ。まあここは人間界だしこの地方の呼び方が……大熊さんとかかね。うん、これからは大熊さんって言うてくれ。【テラの遺産】の影響がでるまでよろしくたのむね」

「ははっよろしく、よろしくねー……はははははは」

夏休みの終わりが近づき秋の香りが微かに香り始める平凡な日常に突如現れた謎の悪魔・大熊さん。

この日から平凡なガリ勉メガネの生活が急変する。

一体どこに向かうのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5598h/>

あつ熊様

2010年10月9日02時01分発行